柳澤壽男福祉ドキュメンタリー映画祭　第２回

夜明け前の子どもたち

日時●2021（令和３）年７月25日（日）　２回上映
①10時30分～12時50分　②13時30分～15時50分

入場料●300円（当日のみ。資料代含む）

会場●藍住町総合文化ホール　大ホール
771-1203　徳島県板野郡藍住町奥野字矢上前32－1
☎088・637・3344

主催●徳島で柳澤壽男監督作品をみる会
（代表＝ＮＰＯ法人太陽と緑の会　☎088・642・1054）

共催●藍住町総合文化ホール

●柳澤壽男監督（1916～1999、享年83）は、近年高く再評価されているドキュメンタリー映画の巨匠です。小川伸介、土本典昭、黒木和雄などの優れた監督が尊敬したことでも知られます●特に福祉ドキュメンタリー５部作は、障がい者問題を静かに見つめ、色あせない問題提起を我々に投げかけてくる力強い作品で、東京や神戸などで上映会が行われています●映画史的には2018年に新宿書房から分厚い資料集『そっちやない、こっちや　映画監督・柳澤壽男の世界』が刊行されたことで、その作品評価はゆるぎないものになりました●この企画は、監督の弟子筋にあたる太陽と緑の会・杉浦良が、天国の師匠に捧げる渾身企画です●徳島で５年間かけて柳澤福祉ドキュメンタリー５部作を藍住町総合文化ホールで上映する試みです。多数ご参集ください。

夜明け前の子どもたち

企画＝財団法人大木会心身障害者福祉問題総合研究所
製作＝国際短編映画社
監修＝糸賀一雄/指導＝田中昌人
製作者＝馬淵恭子、浴永三男
脚本＝秋浜悟史/監督＝柳澤寿男
助監督＝梅田克己、田村俊樹
撮影＝瀬川順一
撮影助手＝岩永勝敏、秋山洋
照明＝久米成男/音響構成＝大野松雄
音楽＝三木稔/解説＝伊藤惣一
録音担当＝片山幹男
製作担当＝斉藤武彦、山打寛俳
録音＝東京スタジオセンター
現像＝東洋現像所
1968年/16ミリ(原版35ミリ)
白黒/120分

医療と教育の一体化をもって障害者に働きかけようという「びわこ学園」の試みの記録。

■製作の意図

心身障害児の、いわゆる記録映画は、すでに数多く作られている。だが、この映画はそれらの中の一つではない。カメラが障害児に対する療育活動に積極的に参加し、心理学者、医者、機能訓練士、指導員、保母、看護婦らの療育者グループとともに、日常生活の中で療育とはなにか、を追求した異色のドキュメントである。

●すべての人間は、その発達において共通の道をもつ。

●発達のつまづきは、わたしたちだれにでもある。その中で、外界に歩行と言葉をもって取りくむ段階の前でつまづいているひとたちを、かりに重症心身障害児といっている。

●しかし、わたしたちがそうであるように、このひとたちも、発達の質的転換期のなかで豊かさをつくる。

●「療育」は、それへの働きかけであり、そこでの指導者と子どもたちとの人間的共感があって、はじめて成り立つ。

●そうした関係が、問題を特殊なものとせずに、広く社会に展開していかなければならない。

このような「発達保障の思想」つまり「すべての人間の発達が、保障されなければならない」という考え方を土台として、いま「びわこ学園」を中心に療育活動が行われている。医療と教育の一体化をもって障害児に働きかけようとするこの試みは、まだはじまったばかりで、世界でも前例のないことでもあり、試行錯誤のくりかえしが長期にわたってつづくことであろう。この療育活動に、もしも、映画が直接参加して障害児たちの発達の過程を追跡記録をするとしたら、日常の実践において見過ごされていた「新しい発見」が期待されるのではなかろうか――これが映画「夜明け前の子どもたち」製作のきっかけとなった。そして療育への映画の取りくみがはじまって四年有余の準備を経て後、昭和四十二年三月から約一年、スタッフが施設内に泊りこみで撮影に専念した結果は予想を上回る効果をあげることが出来たのである。使用した一四五、〇〇〇フィートのフィルムには、専門の指導者も驚くさまざまの新事実の映像が焼きつけられており、いきいきとした障害児たちの人間的豊かさがわれわれに語りかけている。このことは、指導者たちの療育への自信をいよいよ深めさせるとともに、やがては、学問の新しい分野の開拓や、乳幼児教育の方法確立などの契機ともなり、人間が人間になっていくということがどういうことかの問いに答える道にもなるとして、この療育記録映画を世に贈ることになったのである。

映画は、教百人の園児の中から十数人を選んでスポットを当て、さまざまな角度から捉えた問題点を横糸に、療育活動の在り方を従糸として織りあげていく。そして、人間の発達は上へ伸びることばかりではなく、横へのひろがりの中でこそ豊かな人間がつくられて行くのだということを指導者と子供たちの集団の日々の暮らしの中で訴えようとしている。

■夜明け前の子どもたち〈シナリオ〉より

光を感じているが見えてはいない。音を感じているようだが聞こえない。

口は、口はただ食べ物を流し込まれるためにだけあるようだ。そうして10年間をねたきりで暮らしてきた。

重症心身障害児とよばれて。

歩むことのできる子どもたちがいる。「動き回る重症心身障害児」とよばれている。

今音楽にのって歩を刻んでいる。そのはずだ。

「そのはずだ」というのは子どもたちの心のうずきを、体の歪みを伺い知るのは非常に難しいからだ。

分からないことが多すぎる。しかし、この子どもたちも人に生まれて人間になるための発達の道を歩んでいることに変わりはない。そう考える人たちがいる。

障害を受けている子どもたちから発達する権利を奪ってはならない。どんなに分からないことが多くてもどんなに歩みが遅くても社会がこの権利を保障しなければならない。そう考える人たちがいる。